

## 陶による現代美術としての表現 —工芸と現代美術の臨界点—

田中 哲也 *Tetsuya Tanaka*  
(美術学部)

私は13年ぐらい前から、陶と陶をボルト、ナットで連結させる作品QOOシリーズを作っている。陶をボルトで連結するという技法は、今までにあったが、連結部分を一つの見せ場として建築的な美しさを提示した。また7年ぐらい前から、陶芸家にしか出来ない現代美術とは何かと考え制作している。我々陶芸家は器を作るが、見えないものや、形のないものを盛る器を作ることにより新しい表現が可能だと考え、2010年には、音を盛る器というコンセプトでHIBIKIを制作した。2012年からは、光を盛るための器というコンセプトでKAGAYAKIシリーズを制作している。本体には、焼成すると半透明になる土を使用し、作品内部に光源を入れ作品を発光させている。

私の作品は、工芸であり、現代美術でもある。日々、その交差点あるいは臨界点を提示できないだろうかと考えている。そして新しい領域あるいは様式を展開できないだろうかと考えている。発表の場も最近では、大地の芸術祭、神戸ビエンナーレ、BIWAKOビエンナーレなどの現代美術のイベントに出展することが増えている。また陶芸の分野ではこの10年ほど、レジデンスやワークショップ、展覧会等で台湾、ロシア、インド、アメリカ、韓国等の海外に行く機会が増えている。海外に出ると日本の工芸とクラフトは同意義でないことを良く感じる。大概の国でクラフトとアートは分かれており、陶芸では、器を作る作家は器だけ、アートピースを作る作家は、アートピースだけであるが、日本の陶芸家は、どちらも作れ、作品として発表している作家が多い。歴史的な背景、大学の陶芸教育、日本経済等が起因しており、クラフトとアートの境が曖昧と言える。

このようななか最近、自分が何処にいて何をしたいかを明白にする事が大事だと考える。世界の中で何を背景に何をしたいかという横軸的な値と、工芸史、現代美術史の文脈のなかで何を継承しどの様に展開してゆくかの縦軸的な値において。工芸史、陶芸史での立ち位置は分かるが、現代美術史、美術史での位置はそれらが大きすぎて把握が難しい。陶芸家、現代美術家、どちらでもある、どちらでもない、或いは新しい領域、いずれにせよ現代美術に一步踏み入れた以上、美術史の中での座標を把握することが必須と言えよう。

IAC 国際陶磁アカデミー会員 田中哲也

作品展示事例①

BIWAKO ビエンナーレ 2007 風土-Genius Loci 会場風景 2007年9月30日～11月18日  
主催 NPO エナジーフィールド 近江八幡市街（滋賀県）

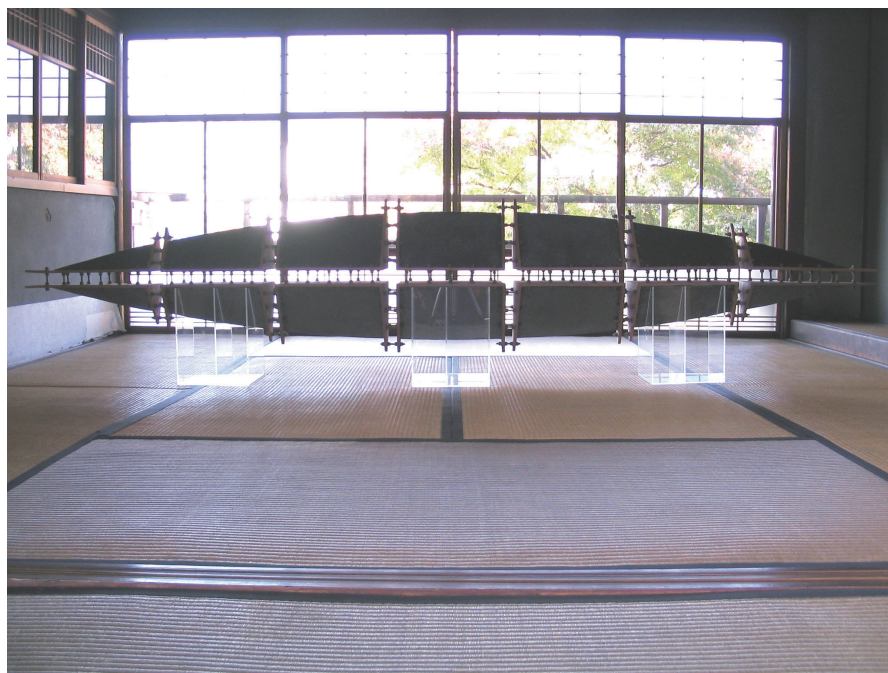


図 1



図 2



図 3

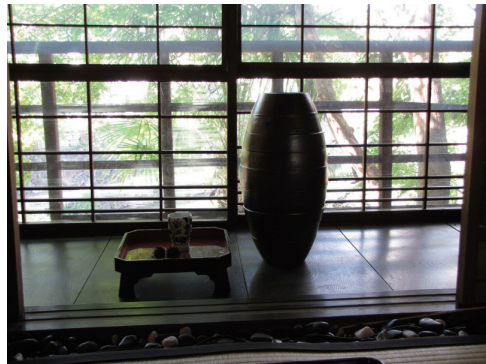
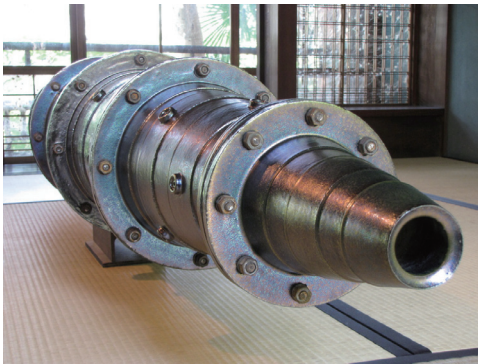
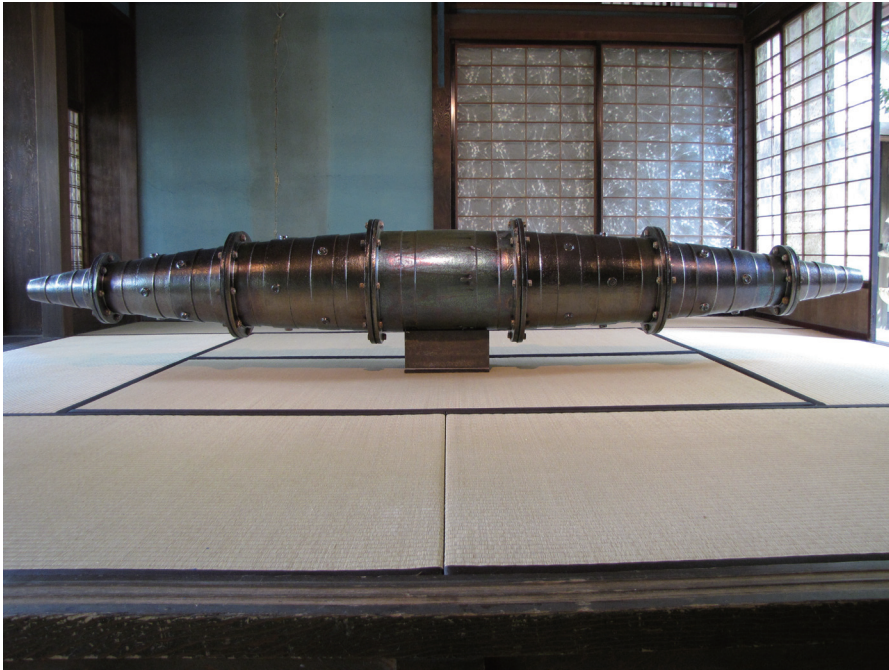
図 1, 2 空 (QOO)-近未来ノスタルジー 2007年 70×320×33cm ミクストメディア 陶、ボルト、ナット

天籟宮二階の六畳間、八畳間に展示した。六畳間には、茶道具、花器 (図 3) を展示し、八畳間には、空 (QOO)-近未来ノスタルジーを展示。会期中に空 (QOO) を見ながら、お茶を楽しんで頂くというワークショップを行った。

その時の模様は、動画で <http://www012.upp.so-net.ne.jp/tclaywork/movie.html> より見る事ができる。

## 作品展示事例②

BIWAKO ビエンナーレ 2010 玉手箱 Magical World 展示風景 2010年9月18日～11月7日  
近江八幡市街（滋賀県） 主催 NPO エナジーフィールド



**響器-HIBIKI** 2010年 50×286×41cm ミクストメディア 陶、ボルト、ナット、H鋼 その他デバイス  
として マイク、アンプ、スピーカー、赤外線センサー

ろくろで挽いた土管状の陶器をボルトとナットで連結させ、ひとつの作品にした。この作品のろくろ技術は独特のもので、連結させた時にきれいなカーブが出るように、設計時にへら状の型を作る。

「響器-HIBIKI」のコンセプトは、音を盛る器。作品の前に立つと室外の音が、作品内部から聞える仕組みになっている。それまで微かに聞えていた外の音が、急に大きく聞えることによって、鑑賞者は、今まであった障子や壁がなくなったような覚醒した感覚を覚る。

人の脳の情報は、80%視覚から得ているといわれている。響器を見て、視覚情報により、一見、金属に見える物体は一体何だろうと思う。そして音が聞えて、その音が何の音で、何処から聞えてくるか分かるまで数秒間掛かる。やがてその音は消え、その場に静けさが戻る。室外の音は、室内が静かであるから聞える。普段、意識しない室外の音を聞くことによって、その場が静かであることを再認識される。

「響器-HIBIKI」には、室外の音を盛ることにより、静けさを盛った。

作品展示事例③

大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ 2012 展示作品

※写真は、滋賀県野洲市兵主大社 滋賀県重要文化財楼門のライトアップに伴う展示



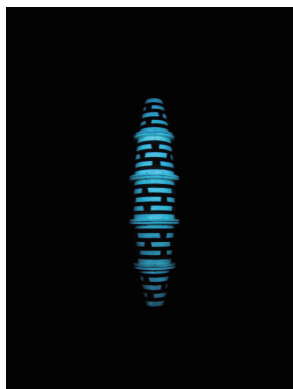
輝器 -KAGAYAKI 2012年 輝器本体：288×36×36cm 立体枠：360×151×145cm

表現媒体 ミクストメディア 信楽透土（滋賀県登録商標 信楽透器）、太陽パネル、輝度センサー、ブラックライト蛍光管、蛍光材、アクリルボルト、アクリルナット

輝器本体には、2009年に信楽窯業試験場で開発された焼成すると半透明になる土、信楽透土を使用した。電源は太陽電池（一部コンセントより供給）、光源は通称ブラックライトと呼ばれる不可視光を使用した。作品内部には、蛍光顔料が焼付けてあり、ブラックライトを浴びることにより発光する。この還元・再生のプロセスにより生まれる光が、人々の魂を浄化させるようなものとなればと思う。

#### 作品展示事例④

BIWAKO ビエンナーレ 2012 御伽草子〜Fairy Tale 展示風景 2012年9月15日〜11月4日  
近江八幡市街（滋賀県） 主催 NPO エナジーフィールド

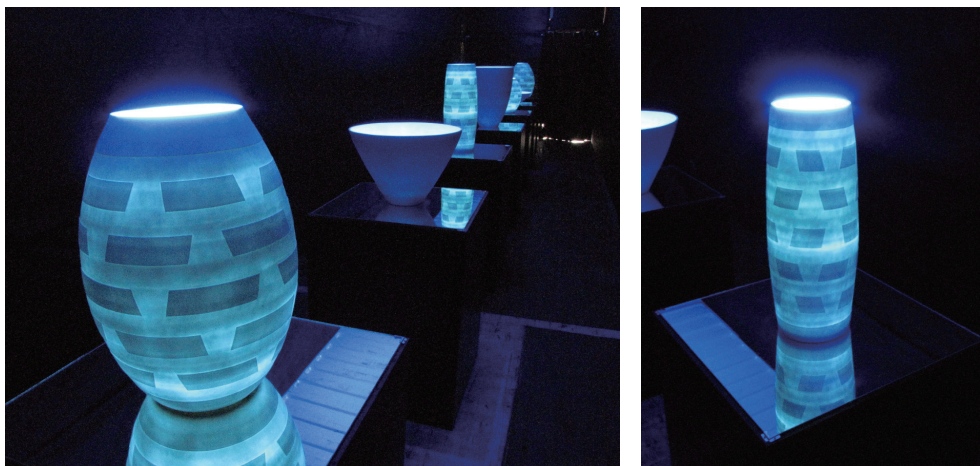


輝器 (KAGAYAKI) - COCOON 2012年 120×28×28cm

表現媒体 ミクストメディア 信楽透土（滋賀県登録商標 信楽透器）、ブラックライト蛍光管、LED  
ブラックライト、スイッチタイマー、蛍光材、蓄光材、アクリルボルト、アクリルナット

光の器というコンセプトでの2作目。光源はブラックライト蛍光管とLEDブラックライト（スポットライト型）、作品内部には、蛍光材を焼付け、外側には、蓄光材を成形時のデザインにそって、凸部に塗り、焼き付けた。スイッチタイマーを使用し、光源を約1分ON、約10秒OFFを繰り返す。ON時は、作品内部の蛍光材が発光し、OFF時は、外部の蓄光材が発光する。この作品においては、光の神秘性を求めた。

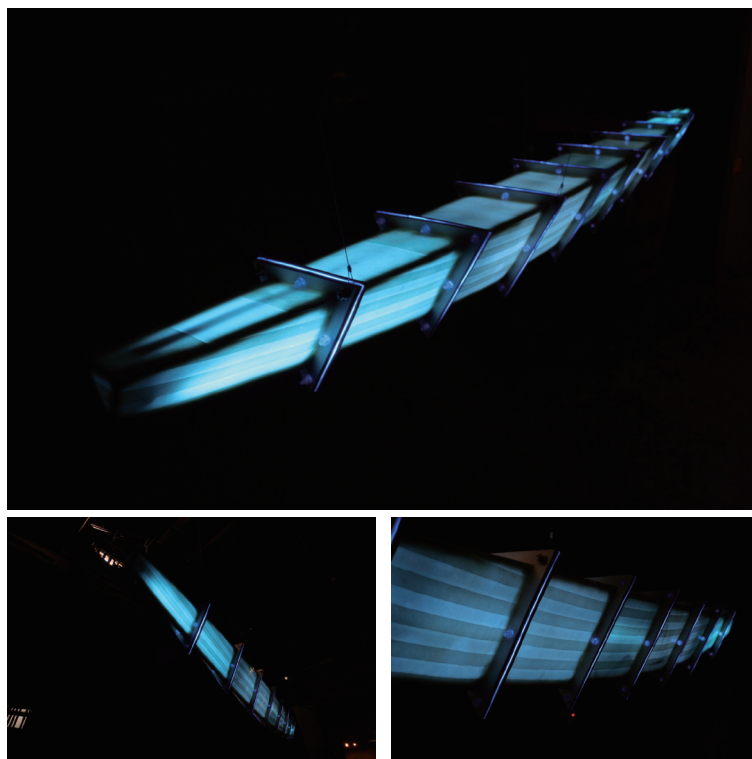
作品展示事例⑤



輝器（KAGAYAKI）- 光の器 2013年

表現媒体 ミクストメディア 信楽透土（滋賀県登録商標 信楽透器）、ブラックライト、蛍光材  
神戸ビエンナーレ2013 アート イン コンテナ国際展 展示風景 2013年10月1日～12月1日 神戸市周辺

作品展示事例②



輝器 KAGAYAKI-Vessel of Light 30×250×40cm 2014年

ミクストメディア 信楽透土、ブルー蛍光管、アクリルボルト、アクリルナット 撮影：藤井友樹  
BIWAKO ビエンナーレ2015 泡沫 展示風景 2014年9月13日～11月9日 近江八幡市街（滋賀県）